第15回

平日の午後のコンサート。

10.8（火）14:00開演
東京オペラシティ コンサートホール
Tue. October 8, 2019, 14:00
at Tokyo Opera City Concert Hall

〈ザ・コバケン Ⅰ〉
"The Kobaken" I

指揮とお話　小林研一郎
Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

ナビゲーター　田添菜穂子
Nahoko Tazoe, MC

コンサートマスター　依田真宣
Masanobu Yoda, concertmaster

10/8

イヴァノヴィッチ：ワルツ『ドナウ川のさざ波』（約7分）
Ivanovici: Waves of the Danube Waltz (ca. 7 min)

ヴォルフ=フェラーリ：歌劇『マドンナの宝石』間奏曲（約5分）
Wolf-Ferrari: Intermezzo from opera "The Jewels of the Madonna" (ca. 5 min)

ウェーバー：歌劇『魔弾の射手』序曲（約10分）
Weber: Overture from opera "Der Freischütz" (ca. 10 min)

— 休憩 intermission（約15分）—

ドヴォルザーク：交響曲第8番 ト長調 Op. 88（約40分）
Dvořárk: Symphony No. 8 in G major, Op. 88 (ca. 40 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）｜
独立行政法人 日本芸術文化振興会
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan |
Japan Arts Council

本公演は新宿フィールドミュージアム関連イベントです。

イラスト：ハラダチエ

10.8

©K.Miura

小林 研一郎　指揮とお話

Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

東京藝術大学作曲科および指揮科卒業。第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞受賞。ハンガリー国立交響楽団音楽総監督、日本フィル音楽監督、アーネム・フィル常任指揮者をはじめ、国内外のオーケストラのポジションなどを歴任。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、星付中十字勲章、2010年にはハンガリー文化大使の称号が授与されている。2011年文化庁長官表彰を受ける。2013年秋の叙勲で旭日中綬章が授与された。現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、読売日響の特別客演指揮者、群響ミュージック・アドバイザー、九響の名誉客演指揮者、東京文化会館音楽監督、長野県芸術監督団音楽監督、東京藝術大学、リスト音楽院名誉教授、ローム ミュージック ファンデーション評議員などを務める。

小林研一郎オフィシャル・ホームページ http://www.it-japan.co.jp/kobaken/

プログラム・ノート

解説＝柴田 克彦

10.8

コバケンが日本人の琴線を刺激する哀愁の調べを紡ぎ出す

今回の「平日の午後のコンサート」は〈ザ・コバケン Ⅰ〉。来年2月の「休日の午後のコンサート」の〈ザ・コバケン Ⅱ〉と合わせて、“炎のマエストロ”小林研一郎お得意の楽曲が披露されます。

「Ⅰ」に登場するのは懐かしい名曲たち。『ドナウ川のさざ波』は、かつて誰もが小学校時代に触れた作品で、『マドンナの宝石』間奏曲は、SPレコードなどで親しまれた往年の人気曲です。しかしこれら（特に前者）を現代のコンサートで耳にする機会は少ないだけに、ここは貴重なチャンスです。『魔弾の射手』序曲とドヴォルザークの交響曲第8番は、今も頻繁に演奏されている作品。それでも『魔弾の射手』のホルンの響きに音楽鑑賞の時間を思い出す方がおられるかもしれませんし、ドヴォルザークの8番は音楽そのものが懐かしさを感じさせます。

全体に共通するのは、日本人の琴線を刺激する哀愁の調べ。円熟のマエストロが、その音楽を存分に歌わせ、深い感動を与えてくれます。

©上野隆文

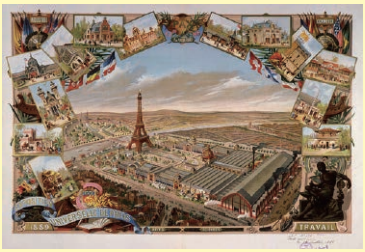
10.8

パリ万博で世界的人気曲に。憂いを帯びたおなじみの旋律

Iosif Ivanovici

幕開けは**ヨシフ・イヴァノヴィッチ**（1845－1902）の**ワルツ『ドナウ川のさざ波』**。イヴァノヴィッチは、ルーマニアの作曲家兼指揮者で、同国独立後最初の軍楽総監督も務めました。ワルツや行進曲など350曲余りを作曲したとされていますが、現在では本作以外のほとんどが忘れられて（もしくは紛失して）います。

本作は1880年に作曲され、1889年のパリ万国博覧会で演奏されて賞を獲得。それをきっかけに世界へ普及し、アメリカでは歌詞が付されて「アニヴァーサリー・ソング」の名でヒットしました。曲は、序奏、4つのワルツ、コーダからなる、ウィンナ・ワルツなどと同じ構成。力強い序奏に続いて、憂いを帯びたおなじみの旋律が登場し、短調と長調が交替しながら、優雅で哀愁漂う音楽が展開されます。ちなみにヨーロッパ第2の大河ドナウは、J.シュトラウスの『美しく青きドナウ』の影響もあってオーストリア（あるいはハンガリー）のイメージが強いかもしれませんが、実は10カ国を流れており、流域の広さではルーマニアがトップです。


1889年のパリ万国博覧会の絵葉書

喜歌劇を得意とした作曲家には珍しい悲劇中の間奏曲は、古くから単独で演奏されてきた人気曲

Ermanno Wolf-Ferrari

おつぎは、**エルマンノ・ヴォルフ＝フェラーリ**（1876－1948）の**歌劇『マドンナの宝石』間奏曲**。ヴォルフ＝フェラーリは、プッチーニの18歳年下にあたるイタリアの作曲家で、オペラをはじめ

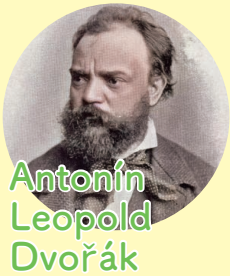
数多くの作品を残しましたが、現在演奏されるのは、本作や歌劇『スザンナの秘密』など一部に限られています。『マドンナの宝石』（1911年初演。全3幕）は、義妹マリエラに恋心を抱く鍛冶屋の青年ジェナロが、彼女のために聖母の宝石を盗み出すも、マリエラは盗賊の首領のもとに走り、ジェナロは自殺する……といった、作曲者には珍しい悲劇。オペラ自体はほとんど上演されませんが、第2幕の前に演奏されるこの間奏曲は、古くから単独で愛されてきました。曲は、甘く感傷的な旋律がヴァイオリンで切々と歌われ、オーボエが活躍する中間部で曲調をチェンジ。その後主旋律がより感情を込めて奏され、静かに終わります。

悪と善が対立・葛藤するかのように展開するオペラ全体の内容を凝縮した劇的な序曲

前半最後は、**カール・マリア・フォン・ウェーバー**（1786－1826）の**歌劇『魔弾の射手』序曲**。本オペラは、このドイツ・ロマン派の草分け的作曲家の代表作にして、“ドイツ初の国民オペラ”と称される記念碑的な一作です。1817年頃から1821年5月までの長い期間をかけて完成。同年6月ベルリンにて作曲者自身の指揮で初演され、画期的な成功を収めました。全3幕の物語は、1650年頃のボヘミア（当時はドイツの支配下にありました）の森に囲まれた農村が舞台。若い猟師マックスは恋人アガーテと結婚するために射撃大会での優勝を余儀なくされます。射撃が不調だった彼は、悪魔に魂を売ったカスパールにそそのかされて狼谷へ行き、必ず当たる魔の弾丸を入手します。ところが大会でそれが露見。彼は窮地に陥りますが、最後はアガーテの純愛に救われます。

単独で演奏される機会が多いこの序曲は、オペラ全体の内容を凝縮した劇的な音楽。クラリネットの活躍も特徴的です。アダージョの序奏では、深い森が描写され、4本のホルンによる有名な旋律が奏されます。狼谷の不気味な音楽からモルト・ヴィヴァーチェの主部に移り、マックスの絶望のアリアに基づく激しい第1主題、アガーテの歓喜の歌に基づく優しい第2主題を軸に進行。悪と善が対立・葛藤するかのように展開され、ひと呼吸置かれた後の堂々たるコーダで、愛の勝利が謳い上げられます。

ローカル色と西欧的な交響曲様式を巧みに同化させた『新世界より』と並ぶドヴォルザークの人気作



後半は、チェコの国民音楽に世界的な普遍性をもたらした同国最大の作曲家**アントニーン・ドヴォルザーク**（1841－1904）の**交響曲第8番**。彼の交響曲の中では、第9番『新世界より』と並ぶ人気作です。イギリスで再三歓迎を受けるなど、既に大家となりつつあったドヴォルザークは、1885年に自然が豊かなボヘミアのヴィソカーに別荘を得たのをきっかけに、絶対音楽と民族音楽が融け合った独自の作風を確立していきます。本作はその流れの中で生まれた代表的な1曲。1889年秋一気に作曲され、翌年プラハにて作曲者自身の指揮で初演されました。

この曲、以前は『イギリス』と呼ばれていましたが、由来はそれまで作品を出版していたジムロック社と折り合いが悪くなり、イギリスのノヴェロ社から出版されたことに拠るもの。実際は、地元の自然のイメージを音にした「ボヘミア」と呼ぶべき内容をもった音楽で、ローカル色と西欧的な交響曲様式を巧みに同化させた傑作です。ドヴォルザークの交響曲の内、第7番までの各曲はブラームスやワーグナー、第9番『新世界より』はアメリカの現地音楽の影響が反映されていますので、本作は地元色が全編を支配した唯一の交響曲ともいえるでしょう。

曲は、円熟期の音楽性がフルに発揮された充実作。第1楽章冒頭の憂いに充ちた旋律は、ト長調を基本とする楽章でありながらト短調で書かれた、意外性のある手法です。第2楽章の自然を彷彿させる楽想や幅広いダイナミクス、第3楽章の哀愁漂う美しさも特筆物。交響曲の終楽章には珍しい（ベートーヴェンの『英雄』交響曲が稀少な前例）変奏曲である上に別の主題が加わる第4楽章もユ

プラハから60kmほど南にあるヴィソカーのドヴォルザーク記念館

ニークです。また本作は全体（特に第1楽章）にフルートの活躍が際立っています。

第1楽章 ： アレグロ・コン・ブリオ。序奏の旋律やフルートが歌う明るい主題を中心に、短調と長調の旋律が交替しながら、伸びやかな音楽が繰り広げられます。

第2楽章 ： アダージョ。田園的な緩徐楽章。哀感を湛えた主題に始まり、木管楽器で小鳥の鳴き声のようなフレーズも登場。時に激しく盛り上がり、中間部は明るさと活気を帯びます。

第3楽章 ： アレグレット・グラツィオーソ。スラヴ舞曲を思わせる音楽。メランコリックな主部に、切ないワルツ風の中間部が挟まれます。

第4楽章 ： アレグロ・マ・ノン・トロッポ。ファンファーレに続いて、チェロが出す主題をもとに、変化に富んだ変奏が展開されます。途中で第2主題ともいえる短調の旋律も登場。最後は輝かしく結ばれます。

「ボヘミア」の風景を色濃く残すプラハの夕暮れ

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）。